

アトリエ 琉游舎 だより 150号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年3月29日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

明日ありと思う心のあだ桜 夜半に嵐の吹かぬものは

- 桜の季節がやってきました。桜の盛りはほんのわずか、桜の開花予想を参考にお花見や行楽の予定を立てても、自然はなかなか思う通りにはなりません。この時期は桜の満開の時期を中心に心も体も動いて行きがちです。それも、桜の満開とその散り際の時期に連動して日本人の心情と行動が移り変わって行くところがあるからなのかもしれません。
- 表題は親鸞聖人が詠まれたといわれています。聖人が比叡山に得度を受けるために訪ねたところ、夜半のため得度式は明日にしましょうと促されたときの和歌です。命を明日あると思いついて散ってしまうかも知れない満開の桜に喩えました。夜に嵐が吹けばどんな満開の桜でも散ってしまいます。「明日」でなく命ある「今」を生きると詠んだのです。
- 私の桜のイメージは入学式。ただ私の経験した入学時期には栃木県北部ではまだ満開となる直前だった記憶があります。逆に子供の入学式時の東京では葉桜であった記憶しか残っていません。かつては桜は入学入社、新生活スタートのイメージがありましたが、最近では開花時期が早まり3月の別れの時期と重なって別離を象徴する意味合いを帯びてきたようです。ところで日本人は元来、桜の散ることに別離や無常観を仮託してきたのではなかったでしょうか。
- 「散る桜 残る桜も 散る桜」この句は江戸時代の僧侶で歌人でもあった良寛和尚の辞世の句といわれているものです。辞世ですからこの世との別れを詠んだものです。今どんなに美しく咲き誇る桜もいずれ散ってしまいます。咲き誇る桜も必ず散るときが来るように、私たちの「いのち」にも限りがあります。良寛和尚は泰然自若のままにいのちに別れを告げています。この覚悟の中には限りあるいのちを悔いなく生きてきたという自負が感じられます。
- 仏教者は「いのちの限り（死）」を観て「今を悔いなく生きる」ことを自らに課して実践する者たちです。仏教は「生」の宗教です。親鸞と良寛の歌は、桜が咲き散る、この時の流れの中に彼らが観た、「今」を生きることが唯一の「生」を生きることと伝えてくれます。

4月スケジュール

月	火	水	30	31	4月1日	2
3	4	5	6 映画会 お休み	7	8	9 写経会 お休み
10	11 読書会 お休み	12	13 映画会 お休み	14	15	16
17	18	19	20 映画会 お休み	21	22	23
24	25 読書会 お休み	26	27 映画会 お休み	28	29	30

活動休止

3月末～5月の連休明けまで琉游舎のレギュラー活動（映画会、写経会、読書会）を中止致します。琉游舎自体はオープンしています。いつでもご利用ください。

狂言綺語…宗教的自由

4月の誕生日が来ると満65歳になります。先日介護保険証が市から届きました。また65歳になると厚生年金、国民年金分の受給予定の満額を受け取ることができます。就職をして厚生年金を納め始めた当時は年金の受給年齢は60歳だったのですが、30数年後の退職時には65歳になってしまいました。平行して再雇用や定年延長の対応策がとられましたが、私は早期退職をして仏道に入ったため、最近まで無職、無収入で妻の扶養家族として生活してきました。退職後65歳になり高齢者として認知されるまでの間は、会社員などの所属組織に規定される社会から解放された自由な日々を送ることができました。誰かから、何らかの対価として収入を得る行為は税金等の義務や社会人としての立場がありますが、そこに縛られなかったここ数年の私のありのままの毎日も、今後は高齢者や年金生活者という社会制度上の立場を与えられることになるようです。

以前当欄でも言及しましたが、インドのヒンドゥー社会にはアーシュラマ（住期）という理念的な人生区分の考え方があります。アーシュラマは学生期、家住期、林住期、遊行期の四住期です。「学生期」は師のもとでヴェーダを学ぶ時期。ヴェーダは宗教文書であり知識のことですので、まずは一人前になるための学びの時期。学生時代です。「家住期」は家庭にあって子をもうけ一家の祭事を主宰する時期。経済活動を行い家族を守り先祖を祀る一家の大黒柱であり、社会的責任を引き受ける時代です。「林住期」は森林に隠棲して修行する時期。経済活動からの引退。そして一族の財産と祭祀を子供に相続させ、社会的責任から解放されます。社会的存在から宗教的存在への移行です。「遊行期」は一定の住所をもたず乞食遊行する時期。森林での修業を経て真の宗教的自由を得、あるがままに道を遊行する時期です。宗教的生活の実践、信行一致の日々です。この四住期の理念を社会的責任の視点から見ると、基礎（学習）をしっかりと作り、その上に組み立てる実践（経済活動）と結果の還元、継承。それらの責任を果たしたのちに社会的責任から解放され、宗教的存在へと移行、そして真の宗教的自由（悟り）の獲得です。インド人が考える人としてこの世に生まれてきた私たちのあるべき理想の姿です。お釈迦様も同じような人生を辿ってきました。小国の王子として生まれ結婚し子供も設け、家住期を果たした上で出家し宗教生活に入り、新しい宗教、「仏教」を創唱します。仏教において宗教的自由は社会的責任を全うすることによって初めて獲得が可能な自由なのです。

仏教は社会的責任の実践を土台にして成立している宗教です。仏教者に、生まれながらにして宗教的人間である人は存在し得ないのです。仏教の目的は「苦」からの解放です。その「苦」は生きることによって否応なしに「生」にまわりついてきます。「苦」がなんたるかを知らずして「苦」からの解放を教えとして伝えることは不可能です。お釈迦様は「学生期」と「家住期」に「苦」にまわりつかれる日々を過ごしてきたに違いありません。だからこそ「苦」の源泉である三毒、つまり貪欲（むさぼること）瞋恚（怒ること）愚痴（理非がわからないこと）の三つの煩惱をありのままに観ることができたのです。社会的責任の実践によって悟った「苦」の源泉と解放を、社会的責任から解放された立場で遊行しながら人々に説いてきたのです。四住期の理念に従えば、私たちお釈迦様の弟子たちは自らの「生」にまわりつく「苦」を払い落とすだけでなく、身近な人から順々に人々の「苦」を払い落とす役割を担う者たちです。社会的責任から解放されて得た宗教的自由を、今度は社会に還元していくことこそ私たちがお釈迦様から委嘱された勤めです。

社会的責任の実践と宗教的自由の獲得、それらの還元と継承。この私たちがインド人に学ぶ人生のあり方が仏教の存在意義でないかと、今私は退職後の遊行期を過ごしてきた宗教的自由の成果をこのように認識することができます。社会的義務の空白期間（遊行期）に培った「ありのままに観る他者（社会）の捉え方」を「高齢者」と「年金生活者」の名称で私に新たに加わる社会制約の中でどのように実践（行い）の日々を送ることができるか、それは宗教的自由の中で信行した功德を社会的自由の実現のために回向し続けることと語ることは分不相応な大言壮語に聞こえてしまうでしょうか。日常的な生活に沿って語れば、私が家住期で獲得した利益と経験を遊行期の中で熟成・発酵させ、それを日々の生活の中に還元していくことです。

半年ほど前から、最近亡くなった大江健三郎の小説を読み直しています。高校時代に、栃木の書店で手に入らない本は神田の古書街まで出かけ手に入れようと試み、出版されているすべての小説を読破していました。ところが20歳を過ぎたとたん、新作が出ても殆ど手に取ることがなく、40年ほど彼の小説とは無縁で過ごしてきました。自己と他者との関係性を難解で韜晦した硬質の文体で語る小説に、まだ社会的に未熟な青年が、当時なぜあれほどまでに熱狂したのか、遊行期を過ごして今やっと分かってきました。40年の時を経て、文体の美しさと人間心理の描写が何の抵抗もなく私の中に流れ込んで来るのです。それまでは三島由紀夫の耽美的なきらびやかな文体を美しいと思っていたのですが、それは化粧を施した文体です。ところが大江の文体はすっぴんの美しさです、そして他者と自己の関係性を語るとき、その文体は宗教的な純粋さを指し示します。彼の小説を宗教的と評することに違和感があるかもしれません。私は宗教を自己と他者（他人・社会）の関係性の解決策を示す処方箋と考えます。私は40年の経験を熟成発酵させることで彼の小説にその処方箋を明らかに観ることができました。例えば初期の長編「個人的な体験」は主人公鳥（バード）の宗教的覚悟が書かれています。覚悟までの過程が宗教的自由の獲得の過程なのです。

生きることの「苦」を他者との関係性の壁に何度も当たりながら解放していったそのことを青年期の私は感覚的に受容していたのでしょう。今私はそれを宗教的自由として受容し還元できることをお釈迦様に感謝致します。

琉游舎：戸井 出琉・恭子

問い合わせ：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

メール：toi101izuru@outlook.jp